

世大

羅社

三國 十房 牛心

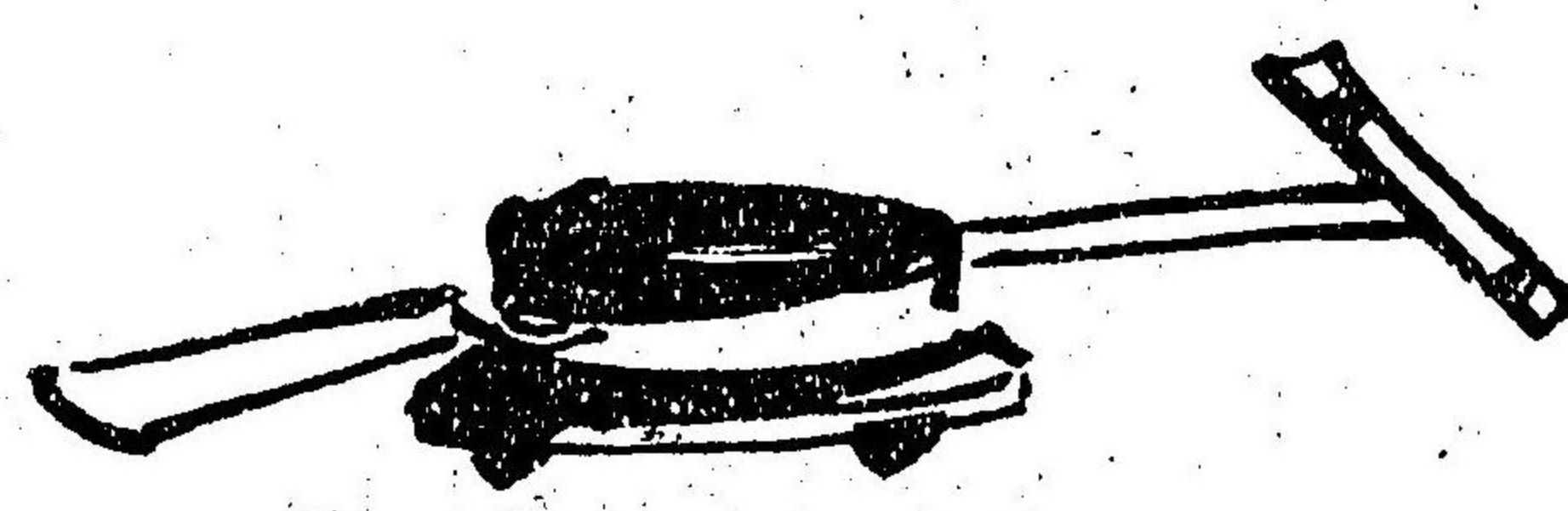


水海

海

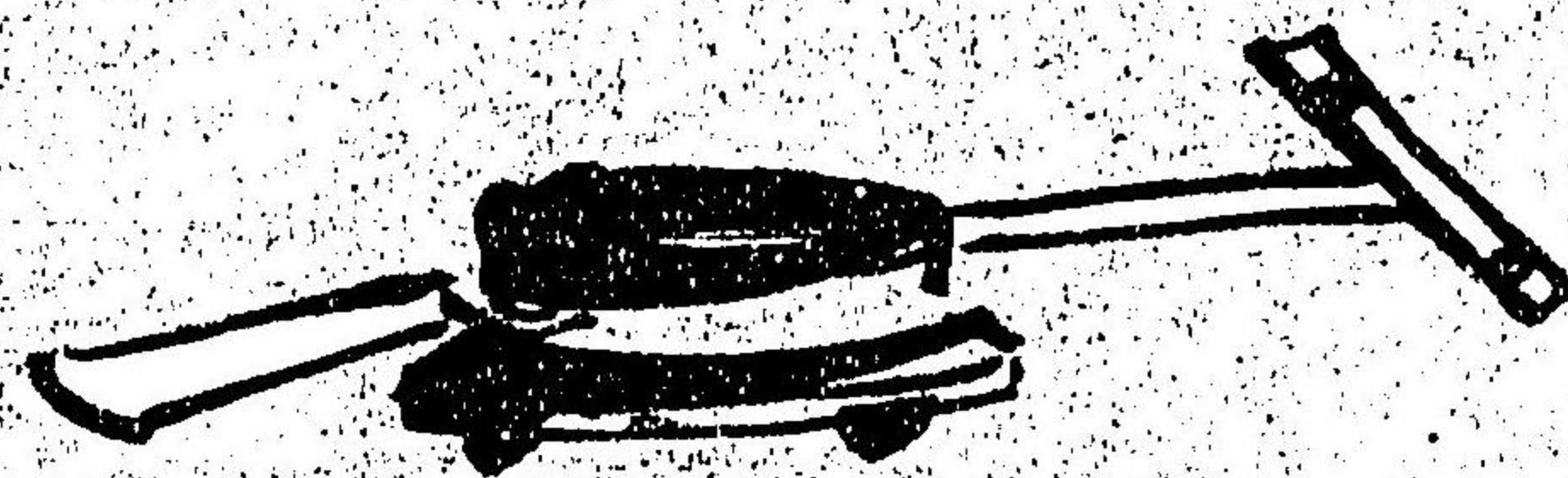
○嗚呼精屈れば九歳余り吾妻の靈場浅草寺の奥山に三十三所の觀世音菩薩靈驗灼然たる
 由来を纏纏め百物天真創業工松本喜三郎大人の活木偶くふらのを鬧場ふし看客の騰潰さ
 一舌を巻くめ諸人の賞賞する夏閉場の跡猶三年余りも味々のりり又もや明治十年初花
 の頃より取り取り取も直さず同所にて再び誤を興行ありし此度は是前に彌増て三十余週間
 の間業に概もまきまきする大人「善い」や「おれ」里浪花の浦の南部とて腰ふ人も千日の正座の向
 象建屋へ此の二月の初旬より氏一世代とて茲に移りて觀せける歩行を運ぶ看客は千手
 觀音の掌より多く日驚ける通券は三十三間堂の佛員「異ならず」ともよく高く評聞く僕もワ
 一走り拵りて傾載せんと清水の舞臺を飛た心地して三錢門を奮つて觀は着程手際の精工
 感上堪たる傍に二個の看客木偶に指者不解評をする人ありて「鉄面皮の先生おふ氏の手
 際其の穴を凡人の肉眼照して如何に搜索更こそ斤腹痛も」もと咬みかたふ衆人「探れて
 遂に大詰迫り前の二漢と前後より確説も符合ぬ雑談を今耳底に残り」儘活人取評判記
 と題する一小冊をつり書て以看客の参考し供する迫にして則より筋者の舌説し係れるも

目録
 相本の前記
 阿なると見だす
 せんぶら乃
 魁
 魂



○嗚呼持成は九歳余り吾輩の靈場淺州寺の奥山に三十三所の觀世音菩薩靈驗灼然たる
由來を纏綴り百物天真創業工松本喜三郎太人の活木偶てふものを開場なす者客の摩滅
し吉を巻め諸人の賞賛する夏開場の跡猶三年余りの味々のりりか又も明治十年初花
の頃よりして取り直さず同所にて再い讀を興行ありしは此度は以前に彌増て三十余迴開
の閑業に挽ききる大尺の舞やうやう里浪花の浦の南部とて腰人あ千日の正西の向
豪庭屋へ此の二月の初旬より氏の一世代とて茲に移して觀せける歩行を運ぶ者客は千手
觀音の掌より多く目擊ける通泰は三十三間堂の佛具異はずととく高評聞く僕
ト走り持して傾載せんと清水の舞臺を飛た心地して三錢門を看つ 觀は看程手際の精工
感上堪たる勝に二柄の看客木偶に指者不評評をずる人ありても鉄面皮の先生は氏の手
跡の其の定を凡人の肉眼して如何に搜索夏こそ斤腹痛もいゝいと喧かろふ衆人一採れて
遂に大詰追ま前の二漢と前後より確説も符合ぬ雜談を今耳底に残り一儘活人取評判記
と題せる一小冊をつり書て以看客の参考に供する迄にして周より筋者の舌説に係れるも

困致爲るがは
相本の讀ま
何をも見たす
めんぶら乃
魁龍



のにありさればよむ者其心一々一覽を懇願にあくと借欠にあしめ味故罪を罪筆を振ふ
て茲に記す其書の如し

一月づつ
見所
増しぬ
生人形
見物や 元楽

けふも又
増して



作者挿入

○サア元早クキヤ強勢ノ雅踏シヤニカコラクシラ聖テ行チヤ固ラア表木偶の肝心
ガセ馬と眼着留れて下さリキキ無辨を洒落グシ時ノ舞妓や小原女の顔の汗を頭て居る所
と老婆の尖長の油添とのと下雅ノ古小倉帯を用ひる所は中々奇妙シヤナア最一ノ奇妙
あのはらの八瀬の婦人の脚伴は皆後ノ前ノ合々すふ至等トヤと思ふのナソソテ寛筆の脚
伴の有もの女イサふは云をさうい故な夏は東京や西國筋の人ノは判解ぬ夏トヤテソリヤイカ
オの包銀を金ノ乗テヨ突出シて居る如手帳を着ヤ発言ハソグモソんな娘の希望のトヤナ
馬鹿云々貴公の細君の御面影では百遍轉んても賞東ナイヤコレで城の御影は御免し
やのびホイソウダツテ併し松さん松本と云ふ人は如何云人ノ一過顔の見もいをサヨサ思
い高名な人よ夫もあつた大坂新報や画入の朝日杯へ時々賞て出てラ一サ一休佛様の觀世物は
是迄のノ余り聞かいよふた子ノサヨトット往昔ノ天王寺の開帳のつもの時ナア石の華表の在
例ノ籠細工の装束を大佛さんの觀世物うつたをふて其時は榮来入でナ一其後午年の三月
に大江伊兵衛の溝の側て是ト大佛の真行をして成田や上人の口上を云ふて大當りていつ

うのごえん ぼんげうごえん はんやふん おやごま
あが其後頃と佛條を更をせんうア木偶師の親玉は是の松本氏と安本龜八夫うごえん生人
取の年代記は卒平を早夕往とシヨアヨヨ第一番紀州那智山あり和泉式部の袖口は東京
帯人の帯ではないの批針牡針のトて有るのと朱塗の杖は合点云々のぬナア子故実の水解て
たすもの如次り紀三井寺ドヤナ机にある筆は悉く製造してある所は味ひものドヤナ龍
女の左の手は下櫻の枝「涙はいよふ」思の貴公はトウとホト云へは成もあるか上人の顔は
格別善ではない引、杉川寺を親父の衣袋はト美艶遇るよふあ子「其效は觀世の故態と古の
を用ぬ」思ふと思はれる親父の指の小皺の巨細の細子は感心するものト「言上是の第四番鎮尾寺で
湯なり針云くても解てラ「ヨヨ」老婆ラ仕てる左の手はドウモ云へぬ程善ク其機足の甲を見やムツ
クリ内の旗を所は失策ある「た」寸志のゐるのは藤原公の首「やて」ぬは坐皆洋靴の格好
やが熊毛の首でもらうまい「何公東様の腰束を着て毛首林を穿るの然んか判決は普通民の知ぬ夏六
一藤井寺で盗賊の鹿肉を調理するナア諷危の足は松本氏「似合ぬナトエ合がソリヤ三十三
番もあるなくさん」の内あつ「貴公の様」うみあつ「小言を云双うあつものかア」

れて居る防様の顔といひ踏立て居る足の細工ハ活生てるヨ「ダ」是が評判の高い替
防か足の歩行といひ松本足の製作ハ足袋を穿ても指小コチ「カ」カ入居る故漆々見
程備善とい官女は衣袋も立派全體の位置が「コチ」何迄も感心して木樽の嚙着て居て
は困るネ「次」の噴煙煙を見や太鼓の所「多」好だネ「ホ」太鼓と云へば尻が少「細
製ヨ「ダ」ヨリヤ婦人でも和殿小方もあれば頭無ものふてかいた跡は第八番の間巻
襦袢ハ八番の間巻と云ふ夏ものも此「カ」テハ八番と顔面を書てあるモノヲ「保」養製て
あるナ「僕」は未だ一遍も地獄へ趣かネ「カ」ラ善か悪う判然とナイヤ「サ」其「コ」チ
でも正物を見たら談物ものじやろふと思ふて居るのト「道徳上人」の顔は格別よ液
「い」ナ「ロ」上「へ」是か南園堂正面の翁は春日大明神伊勢の天照皇太「ヨ」ク「戯」言を止
て木偶を見ナイ「カ」イヤ「モ」何とも申分る「カ」や「た」が翁の足ろ下た「カ」敷こころ
とい「カ」しては長「カ」何を發論てるんだ「カ」れハ飾付の時「カ」だ「カ」人「カ」足「カ」た「カ」ナイ「カ」
ラ其茲で繼足「カ」したの「カ」だろふと思ふが松本「カ」人「カ」限「カ」り「カ」点「カ」を「カ」打「カ」のは素人「カ」凍「カ」

ラ十番の三笠戸カナ普門品を讀誦して居る娘は感心々々蛇の変化といふ顔付は是
も感心現ふら入一人せずと十一番を見ナイカよしくア、難踏人ドヤア、痛いく岩
間寺は了されたよふでトウド十二番へ来てしもた元ヤたばあれが落たヨ江
お世話さん操れて地口も余リ気楽だぜア、ア芭蕉翁の着附といひ何処ハ一ツ後目な
いどやも知れた夏よ此の小鬼が善イといふて大層な評判の高い場ダヨホ、一次の石止
山寺も云分おしジヤ十四番大津町のお松さんば浮雲のい夏をしたもものな何人だ
入るいデモネークセハ併一措子の折れたカケが見ぬナ一ツナ小細工も夏を云ふ
双かちるもろカア、今熊野の捕かツンナ口の喇らるるものカ城乃画面は奇めう
ダくエイまた人の押サア六角堂かネーリテ手がぶる小言ずしアノか見いよりい
稚児を見おされ如何にも觀世音の御化けはしたといふ顔のよすをひはあうく
小氣を附けよきたもろヤア賞めたのハ好イカ御化け了ばしたとと奇たい賞め
様をしたもろダゼ談の和尚の顔の最新見たのとは夫々変つて居るう味ひや次る定

九郎何の定九郎ナ事の何るものカ勢徑とさへ云へハ定九郎の究込むか可笑シイ
所で談の色も生へた肉太も足の二合イは如何にも放蕩として博奕の負けて嘆息ぬ所
カラ車でも挽て見たら面白いか所ら夜盗でもナツ始メたと云足に製作てるるは真
小妙タコら六ヶい足じやナ一其時代の車夫が居るもろカボンニ是れは大誤論だ
三十番の普峯寺と此の松葉始終松の葉杯の製造物で仕て居るのか松本さんの御
家の一流技等を氣を著て見おされ氣を著ると云へば何る捕師は真白の衣獲ガカ足
下ハ如何おもふサア私もうふは思ふけれど一山神の变化とでも云ふ様か夏カと思
ふて成程コイツハ下平頂載だ是ハ二十一番の兜總寺相替り冷觀音の顔ハ別段好では
あいか婦人が病着のうへ合掌して居る二合と下浴衣は云分おした此の松乃所とさま
いた木偶を親くとまた返さ合ふせ學文勝尾寺を拝観せよ噂よりも十倍増だ此度は眼
目の紫雲山中山寺ア、善イ衣服トヤナアノ髪の色ハ釣揚たる二合と草履の履
だ所と奇々妙々ソシテ元々人御堂の道具も大張込ダネア、お荷の帯ハ例の三寸巾

人と信仰しるうを願ふに「サマシ」の本偶師の腹シヤ「腹シヤ」顔の嘶トヤ判然て居る
 ヨーナ、夫リヤ善イガ鏡告うすに幕が閉つとケコー「長一ツ何故道でも変化
 ろんと喰イ足んよふに思ふナ「ソリヤ劇場の町作テモ觀るよふお氣持で居
 るらゝ痴漢ごと云心のヨ「早よぶ拂口へ出て貰らわんと跡の雜踏件七
 「ホイ是はシタリイヤモ「松の齡のシセ」ぬ喜三郎君の榮譽トヤと持與
 ぶつて歸へリルリ

明治十二年二月廿二日 御届
 同年 月 日 出版

(定價三錢五厘)

編輯人

大政府平民
 旗野儀三郎

出版人

同
 南區山上定之助
 八橋町三十四番地

中の芝居評判記 一三三(五厘)

賣捌所 諸府縣 繪州紙屋

特67

362

074823-000-0

特67-362

西国三十三所生人形評判

榎野 儀三郎 / 編

M12

CEK-0160

